

第8章 金融危機とグローバル・インバランス

福田慎一・松林洋一

〈要旨〉

本章では、金融危機後のグローバル・インバランスを巡るいくつかの代表的な見方を紹介し、再検討することを通じて、上記の問題に対するいくつかの見解を整理する。国際間の資本移動が自由化され、金融市場のグローバル化が進展した今日、国際的な資本移動は世界経済の安定的・持続的成長の達成を考える上でますます重要になっている。特に、世界経済におけるプレゼンスが飛躍的に増大した発展途上国の資金余剰は、「グローバルなインバランス」と呼ばれ、米国の経常赤字を拡大させ、米国内の信用拡大や資産価格の高騰を通じて、その後の金融危機の原因となったという指摘がある。過去の経験を振り返っても、経常収支の悪化が金融危機に先行してしばしば発生した。しかし、相互依存関係が急速に進展する今日の世界経済においては、貯蓄投資バランスというネットの概念以上に、グロスの資金調達、資金運用が重要性を増している。特に、今日、ロンドンなど世界のマネー・センターを仲介して、資金余剰国と資金不足国との間で双方向に巨額な資金移動が存在するなかで、「グロス」の資本移動がますます重要となっている。このため、グロスの資本移動を見据えた柔軟かつ複眼的な視点からの考察が、今後のグローバル・インバランスの動向を考えるうえでも、また金融危機への政策的な処方を検討するうえでも重要である。